
Rhapsody In Blue

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rhapsody In Blue

【コード】

N9999K

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

あるNGOの依頼でカンボジアにおける地雷被害及び撤去の現状を取材し、記事にするために私は、二千年の暮れにカンボジアに向かった。

かの悪名高きクメール・ルージュとポルポトの爪跡は色濃く、今もこの国を蝕んでいる。

あるNGOの依頼でカンボジアにおける地雷被害及び撤去の現状を取材し、記事にするために私は、二千年の暮れにカンボジアに向かった。

かの悪名高きクメール・ルージュとポルポトの爪跡は色濃く、今もこの国を蝕んでいる。

埋設された地雷は、その数、数万個とも言われ未だにその大半が撤去されずに、なんの罪もない人々の命を理不尽に奪ってゆく。

私は結局、NGOの援助で作られた病院を周り、手足を無くし、それでも懸命にリハビリに励む子供たちを見、悲惨な現状を何枚かの写真に収め、早々とカンボジアを後にした。

どうにも、平和ボケの日本に居過ぎたせいなのか私自身の心がなにか蝕まれてゆくような気がしたからだ。

ここに居てはいけないと心が警告音を鳴らし続けていた。

私は本来ジャーナリストではないし、ただのモノ書きなのだからと自分を卑下しながら早々に退散したのだ。

帰国するはずだったのになぜマニラに立ち寄ったのか・・・帰っても寒々しい待つ人も居ない部屋で年を越すのが無性に耐えられなかったからか・・・あのカンボジアの風景が心から離れずその幻影を追い払いたかったのか・・・余ったスケジュールの気紛れからなのか、とにかく私はマニラに何泊かしてから日本に帰ろうと決めた。

国際空港からタクシーで30分ほどでホテルに着いた。

マニラ・ホテルは相変わらずその由緒正しい佇まいを崩さず、アジアで最も古く格式のあるホテルとして

知られている、何よりもその風格が際立っていた。

そして、その繁華街から遠い立地が今の私には必要なのだと思っ

た。

静けさと海沿いの優しく穏やかな景色を心が必要としていたのだ。

ホテル付きの顔見知りのタクシーの運転手が私を見て近寄ってきた。

相変わらず訛りの酷いブローケン・イングリッシュだったが、異国の地で知り合いに会うというのは、なんとも嬉しいものだ。

「ミスター・タケガワ。ヒサシブリダナ、コンドハナンノシゴト
ダ」

私は、仕事ではないんだ・・・ちよつとバカンスを楽しもうと思つてねと彼に伝えた。

年月を感じさせるヨーロッパ調の風格のあるロビーを抜け、チエック・インを終え、部屋でくつろいでいたのだが、いつこうに私の荷物が届かない。

原稿をまとめメールしなければならぬ。仕事を早く片付けてしまいたかった。

これが、この年の最後の仕事になるだろう。

まあ、いつものことなのだが、この国とこの国の人々に流れている時間という概念は日本とは全く違うのだ。

彼らが少しお待ち下さいと言えばそれは小一時間ほどなのだから。

部屋の窓を開けると、まるで森のように木々が茂り草花が良く手入れされた中庭が見えた。

木々に吊るされた無数の電飾が瞬きはじめた。

いつもなら苦笑するのだが、今の私にはこれも一興なのだと思えた。マニラ湾に面した部屋には潮の香りを含んだ夕暮れの穏やかな風が流れ込み、肌に心地よく触れた。

シャワーを浴び、やっと運び込まれた荷物からパソコンを取り出しメールを手エックする。

仕事の依頼が一通、前妻の雇っている弁護士事務所から一通、寂しいものだ。

前妻とはとうに別居していたが、いまだに離婚の係争中で、私は若いやり手の離婚専門の弁護士と果てしのない戦いを繰り広げている。

帰りたくない原因の一つかもしれない。
確かに離婚は、結婚よりも数倍の努力と更に数倍の金がかかる。

カンボジアでの取材した写真を見ているとまたあの記憶が蘇ってきた。

喉の奥になにか異物を感じ、唐突に吐き気に襲われた。

バス・ルームまで走り便器に突っ伏して吐いた。

吐き気は、何度も、何度も波状攻撃のように私を捕らえた。

この歳で良心の呵責でもないだろうに・・・夢を見なくなっていったどのくらい経つ。

ラカンに笑われるかな・・・人は夢があるうちはその夢に向かって生きようとするものなのだ。

だから、夢は持ち続けていなければならない。しかし、夢が成就する側に入ってはならない、なぜなら生きる糧がなくなるからだ。

だから人は夢を夢見続けなければならない。見続ける側に留まるのだ。例えそれが悪夢だとしても・・・。

ドアのブザーが鳴った。11時を過ぎていた。

「ドナタ・・・」

「ハイ、アキノダヨー、アンタノチュウジツナウンテンシユノアキノダ」

ドアを開けた。

「ミスター・タケガワ、バカンスデキタンダロ、オアイテガヒツヨ

ウダロ」

タクシーの運転手のアキノが満面の笑みを浮かべて佇んでいた。

「イリアダヨ、ミスタータケガワ、イイコダ、ヨロシク」

おずおずとアキノの後ろから笑顔を見せる小柄な女性のアキノに押されて私の前に現れた。

「コンナコトタノンダオボエハナイ・・・！」

私の剣幕にアキノが驚いたように後ずさった。

「ダツテシゴトジャナイツテ・・・バカンスダツテ・・・」

「イヤ、ワタシノイイカタガワルイナラアヤマル。イラナイヨ、ツレテカエツテクレ」

押し問答が何度か繰り返された。

「ごめんなさい、アキノ悪くない。一晩でいいの・・・でないと私酷い目に合わされるの・・・」片言の日本語で彼女は言った。

その円らな瞳からは大粒の涙が溢れ、それはリノリウムの床に音もなく落ちた。

彼女がドアを後ろ手に閉めた瞬間から部屋には気まずい沈黙が流れた。

私はたまらずベッドサイドのラジオのスイッチを入れた。

ガーシュイン、Rhapsody In Blueが部屋の中に流れた。それは天井を覆い私の心に届いた。

私は相変わらず泣き続けている彼女をその時初めて正視した。

恐らく二十歳にも満たないだろう・・・若く、美しく、その子はそこに肩を大きく震わせながら突っ立っていた。

長い栗毛色の髪、程よく日焼けした褐色の肌、灰色がかった円らで大きな瞳、溢れ出る大粒の涙、上品な花柄のワンピース・・・。

「日本語分かるんだね」

彼女が小さく頷く。

「突っ立てないで、その椅子に座りなさい。分かっただから、何も

しない・・・一晩ここにいなさい」

彼女はいわゆる高級ホテル専門の娼婦だった。

格式を重んじるホテルはロビーに娼婦を入れない。しかし、ホテル付きのタクシーの運転手や、ホテルのガードマン、従業員などにワイロを握らせれば話は別だ。

私の態度に安心したのか私の求めに応じて途切れ途切れに彼女は自分を語った。

歳は二十歳だと言ったがその涙と同様に嘘なのかも知れない。もっと若いという意味で・・・。

父親は駐留米軍、沖縄にいたこともある父親から日本語を習ったこと、もちろん今は任期を終えて本国に帰っている。彼女たちを捨てて・・・母親はフリッツピーナ、病気がちで三人の子弟を養うために娼婦になったことなどを片言の日本語で話した。

「お腹空かないか、なにか食べようか」

マニラに着いてから何も食べていないことに気づき私は自分に言うセリフをイリアに向かって言った。

イリアは初めて人懐っこい笑顔を浮かべながら、頷いた。

ルーム・サービスで頼んだスパゲッティやら、ピザやら、サンドイッチやらワインやビールを私たちは

空腹からか、無言で食べた。

何よりイリアの食欲が私を幸福にした。

一人で食べる食事ほど味気ないものはこの世に存在しない。

そして、美しい女性が頬張る口元ほど見ていて楽しいものを私は知らない。

イリアの旺盛な食欲は私にとってはラカンやフロイト以上に心を穏やかにしてくれる生への希望そのものに思えた。

私たちはワインをしこたま飲み、ほんの数時間でまるで昔からの既知のように話し、笑いあっていた。

「シャワーを使っている？」

「ああ、どうぞ・・・」

席を立ち、バス・ルームに消えてゆくイリアを眼で追った。

彼女を抱く気などもうとうなかった。

それが、自分に果たした唯一の戒めなのだ。

眠気が襲ってきた。ワイングラスを持ちベッドにゆっくりと腰を下ろす。

ホテルのロゴの入ったマッチで煙草に火を着け、機械的な動作で天井に向かって吐き出す。

明日、ベッドにドルを置き彼女が出てゆくのを見送ればそれで終わり。

もう二度と会うこともないだろう・・・。

FMはサンタナを流していた。好きな曲だった。

確かGame Of Loveって題名だったな・・・薄れてゆく意識の片隅にイリアが忍び込んできた。

目覚めは喉元に巢食った二日酔いの苦さとともにやってきた。

ベッドサイドのテーブルにやっと手を伸ばし、煙草を口に啜えた。

煙の行方を眼で追う。

天井には大型のオーバーヘッド・ファンが物憂げに回り続けている。クシャクシャの白いシーツの上にホテルのネーム入りのバスローブが無造作に置かれていた。

開け放たれた窓辺に裸の女の子が立っていた。

ようやく事態を飲み込めた。

「おはよう、武川さん」

逆光に照らされた全裸の彼女はポツテチエリのヴィーナスを連想さ

せた。

「ああ、おはよう・・・イリアだったね、昨晚はどうも飲みすぎたようで・・・」

ベッドにゆっくりと近づくと近づく彼女をただ眺めていた。その美しさに私は一瞬たじろいだ。

私の頬にキスをし、耳元で囁いた。

「魅力ないのか、わたし・・・武川さん、抱いてもくれなかった・・・」

いや、君は十分に魅力的で、眩しいくらいだと言おうとしたけれど、イリアの柔らかい唇で塞がれた。

イリアの褐色の肌が覆い被さり私のはだけた胸元に栗毛色の長い髪が触れる。

「病気が心配か？ノー・プレブルム・・・性病ないよ、わたし・・・」

灰色の大きな瞳がいたずらっぽくはにかむ。

「抱こうと、抱くまいと一晩の約束だからね・・・金はドルでいいかな、なんならペソに両替するから・・・」

「日本人好きだよ・・・優しい・・・でも武川さんは特別だよ、もっと好きだよ・・・悲しい気持ちだよ・・・」

理性が崖っぷちで揺らいでいた。

私にも一端の性欲くらいはある。イリアはなにより若くしなやかで魅力的な女性だ。

そんな彼女が私の上に跨り、挑発するように私を見ているのだ。

「誤解しないでくれイリア、君を泊めたのは君が困ると思ったからだよ、君と寝たいからじゃない」

私はイリアを跳ね除け、ベッドを下り、冷蔵庫からミネラル・ウォーターを取り出し、一気に飲み干した。

「わたしは居たいよ、武川さんとずっと一緒にいたいよー！」

私を見つめるイリアの円らな瞳は何かを訴えかけているように思えた。

もしこれが演技だとしたら実に狡猾なのだが私には分からなかった。
「さあ服を着て・・・朝食と一緒に食べよう、そうしたらお帰り」

ホテル内の日本料理店で遅い朝食を取った。
従業員のイリアを見る視線が幾分か私の心を痛めた。

イリアの美しさに嫉妬しているのだ、私はそう思うことにした。
イリアは押し黙ったまま料理に箸を付けなかった。

「日本料理はイリアの口に合わないかな・・・」
向かい側に座ったイリアが首を横に振る。

「さあ、ふてくされてないで、お腹空いてるだろう？」

「武川さん・・・お願いあるの・・・一週間ね、わたしを置いて欲しいの、お願い・・・マニラ発つまで一緒にいて・・・」

なぜ彼女をあの時拒絶しなかったのか・・・彼女の魅力にノーと言えなかったのか・・・彼女の何かを訴えるような瞳が私には気になっていた。何よりその瞳は美しく澄んでいたし、ジグソー・パズルのように穴だらけの心を埋めたかったのかも知れない。

その日はホテルのプールで過ごした。

ホテル内のブティックで二人分の水着を買った。

バカンスに来たのだ。顔と腕だけが日焼けしている私の姿はとも見られたものではない。

イリアは弾けるような笑顔を見せ、私は彼女のその姿を見ているだけで満足した。

相変わらず従業員のイリアを見る眼が気になった。

マネージャーを呼び、彼女は私の連れだ、今日から私の部屋に泊まるから、追加の料金は私にと言うと、従業員の視線も態度も一変した。

「横にいつてもいい？」

「ああ、寝たかと思っていたよ・・・」

ベッドに入りながら記事をパソコンに打ち込んでいた私は、視線をイリアに向けた。

裸のイリアがシーツをはぐり、私の身体に密着する。

「まだ、仕事が片付かないんだ、ごめんよ……」

「かまわない、武川さん、明日も一緒にいられる……」

サイドテーブルの携帯が鳴った。

小声で話すイリアの顔が曇った。

「ボスがね、今日は帰ってこいって……」

「かまわないよ……明日も会えるんだから……」

ほんの少しの沈黙の後、イリアが重い口を開いた。

「前金でお金を持ってこいって……ごめんなさい」

「昨日の分も含めていくら払えばいい？」

イリアが伏目がちに言った。

「一日、四千ペソが私の値段よ……」

イリアの瞳に浮かんだ涙は……私は、真実なのだ……そう思った。

次の日の朝マニラを観光しようという約束を交わし、イリアは部屋を出て行った。

イリアは、マニラの観光地の何処にもいったことがないと私に言っただけだ。

イリアに渡した三万ペソと、もしも、イリアが現れなかったとしても私はそれでもいいと思っていた。

何も救うことのできない私の代償として……。

裸足でゴミの山を一日中食べ物や金に換わるものを探し続け、貧困に喘ぐ多くの子供たちの少なくとも何人かはこの金で救われるのかも知れない。

朝、アキノの電話で呼び出された。

エントランスに降りると、ベンツのドアを開けてアキノがにこやかに微笑んでいた。

助手席には、イリアがいた。

「オハヨウゴザイマス、ミスター・タケガワ・・・イリアガオマチカネダヨ」

「アキノ、コノクルマハドウシタンダイ？」

「レンタカーダヨ、ミスター・タケガワ・・・ヤスクシトクヨ、マニラニイルアイダツカツテイヨ、シハライハモチロンアンタダヨ」

治安の悪い猥雑なマニラの市街地を抜け、私たちは城壁都市イントラムロスに向かった。

車中イリアは私の肩にもたれ、腕に手を回し、まるで子供のように華やいだ素顔を見せた。

「武川さんとデートしてる・・・夢のよう・・・」

「嫌でも一緒にいなきゃならない、これから一週間はね」

「いいよ、ずっと、ずっと・・・いつまでだって・・・」

唐突にイリアが頬にキスをした。

「こらっ・・・大人をからかうんじゃない、危ないじゃないか」

リサール公園の北側に位置するインストラムロスは十六世紀のスペイン統治時代の名残を今に残す

史跡であり、第二次大戦でその多くが破壊されていた。

有名な観光地だというのに今日は人もまばらだ。

イリアは石畳の上を裸足で歩き、私はイリアの華奢なミュールを一足つつ拾うはめになった。

再建されたマニラ大聖堂の威容の前でイリアは敬虔なクリスチャンの横顔を見せた。

胸の前で十字を切り何かを必死で祈っていた。

「何を祈っていたの・・・」

「武川さんが一生わたしを忘れないようにって……」
無邪気に笑うイリアを可愛いと思った。私はしてはならない恋に落ちているのではないか……。

サンチャゴ要塞の前で私たちは買ってきたハンバーガーを食べ、昔からの恋人のようにお互いのことを語りあった。

それは一頻り続き、話はこの巨大な要塞に移った。

「独立運動の英雄ホセ・リサールの恋人は日本人だったんだよ」
急に立ち上がりイリアは私をまじまじと見つめた。

「生まれ変わったらわたし日本人になる、そして武川さんのワイフになるよ」

リサール公園のベンチに座り、私たちは肩を寄せ合い、マニラ湾に沈む夕日を眺めた。

赤く陽炎に揺れる夕日は、私とイリアを落日の寂寥に包んだ。
どちらからともなく唇を重ねた。

それは、ほんの一瞬のようで永遠にも感じられた。

離れたイリアの顔が泣いているように見えた。

「……だつて、こんなに綺麗なもの見たことないんだもの……」
何度も見て知っているはずの夕日がこんなに綺麗なものと初めて気づいたのだとイリアは言った。

例によってイリアは私のベッドにやってきた。

「ありがとう、武川さん。今日はとても、とても楽しかった……」
「明日はどこへ行くの？」

「マカティのアラヤ・センターにいこう。わたしが案内するよ」

「よし、そうしよう。ゆっくりお休み……」
イリアの視線が私と絡んだ。

「こんなに良くしてくれて、わたしは何をしたらいい？」

私の胸に顔を埋めてイリアが言った。腕は私の身体をしっかりと抱

きしめていた。

「もう充分してくれているよイリア・・・こんなに楽しい時間を持てた」

「でも、わたしがしてあげられるのは・・・」

「もついいよイリア、眠るんだ・・・それと明日からは下着くらい着けて欲しいな」

イリアの髪を撫ぜ続けた。いつしか軽い寝息が私の胸に響いた。

無邪気に眠るイリアの顔を私は美しいと素直に思った。

彼女を愛し始めている自分がいた。

イリアとの七日間はまるで時の神クロノスの悪戯なのか、瞬く間に過ぎた。

イリアはその若さから私に対する好意をあからさまに見せた。

どんな場所でもキスをせがみ、身体を合わせた。

なぜ、抱いてくれないのかと何度も私を責めた。

私はうまく説明することはできないが君を大切に思っている、愛してさえいる、しかし、君を抱くわけにはいかないのだとイリアに言った。

君を愛してしまったのだ、イリア・・・私はどうしたらいい？

イリアはその度にふてくされ、わめきちらし、仕舞には泣きじゃくった。

そして片方のベッドでふて寝しては決まって真夜中に私の横に潜り込んでくるのだ。

約束の最後の夜、せがまれるままに私はイリアを抱いた。

イリアは離れたくないと言って何度も何度も私にしがみつき、果ては私を求めた。

私の中に永久に自分を留めておくような激しさで何度も、私を求めた。

私ももう自分に正直になる時だ。

「また、会おうイリア。すぐ戻ってくるから・・・君を愛している・
・仕事が片付いたらここに帰ってくるから・・・」

「アイシテル、アイシテル、アイシテル・・・タケガワサン・・・
イリアヲハナサナイデ・・・」

何度も交わった後、イリアは泣いた。私の胸元には湖ができるので
はと思うくらい泣き続けた。

嗚咽は永遠とも思えるくらい続き、泣き疲れてイリアは私に抱かれ
ながら眠りについた。

軽い寝息に愛おしさを覚え、寝顔は天使に見えた。

朝、目覚めると隣には抜け殻があった。

イリアの残り香を抱きしめていた。

私にはこの七日間が夢ではないかとさえ思えた。

イリアの居ない空虚は私を苛み、寂寥が心を覆った。

愛しているイリアを・・・間違いようのない真実が私の心に残った。

全て片がついたらしがらみも何もかも捨ててイリアを迎えにこよ
う。

いや、それが無理ならこの国に住むという選択肢だつてある。

私は自分の大胆さに苦笑した。

残りの人生を彼女のために生きよう。

愛しているイリア・・・君の他に欲しいものは何もない。

マニラ市街を抜け、タクシーが空港に向かう間私はイリアとの思
い出にふけていた。

「ミスター・タケガワ、バカンスヲマンキツシタカイ・・・？」

「スグカエツテクルツモリダ・・・イリアニヤクソクシタカラネ・・・」

「」

「ミスター・タケガワ・・・ソレハムリダヨ・・・モウイリアトハ
アエナイヨ」

「ナゼダ!・・・ドウシテ・・・!?」

「イリアノママガ、シンジケートニウツテシマッタダヨ・・・モ
ウココニハイナイヨ」

「ドウイウイミダ、アキノ!ソレハイツタイ・・・」

「モウキマツテイタコトナダヨ。イリアハアラブのオオサマニカ
ワレタダ・・・ナンニンメカノツマニナルダヨ」

無意識にアキノの肩を掴み叫んでいた。

「モドロウ!クウコウニハイカナイ・・・モドツテクレ!」

沈黙が訪れた。

悲しげなアキノの声が響いた。

「モウオワツタンダヨ。ミスター・タケガワ・・・アンタニデキル
コトハモウナイダ・・・ファイリルトマニラワンニアンタノシ
タイガウカブヨ・・・」

私はその後何度かマニラを訪れた。

そして決まってマニラ・ホテルに宿泊する。

ドアを開けるとそこにイリアが佇んでいるような気がするからだ。
今でも時々イリアのことを思う。

失った今、どれほど彼女を愛していたのか・・・。

あれほどの激しい感情も、後悔も、時は癒してくれるものだ。

ゆっくりと・・・ただ、心に巣食ったイリアへの想いはナイフのよ
うに突き刺さったままこれからも私を苛み続けるだろう、間違いな
く。

私は今日も・・・夢を見ることを夢見、眠りにつく・・・イリア
に逢うために・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9999k/>

Rhapsody In Blue

2011年1月8日18時00分発行